

周作人（チョウ・ツォリン、しゅうさくじん、1885～1967）は、兄の魯迅、胡適らとならぶ近代中国の大知識人である。清朝末期に生まれた彼は、江南水師学堂を卒業後、1906年に一時帰郷した魯迅に連れられて日本に留学、立教大学で古典ギリシア語と英文学を学びながら兄の文学運動を助け、下宿手伝いの娘羽太信子と恋愛結婚した。辛亥革命の年の1911年に帰国、17年北京大学教授に就任して文学革命の理論家として活躍し、新しい知のパラダイムを創り出した。清末から民国初期にかけて登場した新興智識階級が、中国に共和国を建設する過程で貪欲に受容していく個人という概念、フェミニズム論、創作・批評・翻訳をめぐる文壇制度など近代的文化制度の枠組み……これらあらゆる知的フィールドに、彼の大きな影が差している。23年には魯迅とのあいだに兄弟喧嘩が生じ魯迅が北京・八道湾の周邸を出た。日中戦争期には日本占領下の北京で文部大臣に就任したため、戦後国民政府の“漢奸”裁判で10年の徒刑に処せられた。人民共和国成立により釈放されて日本文学翻訳、魯迅研究資料提供の仕事をしてきたが、文革中に紅衛兵よりリンチを受けて死亡した。最近の中国では彼の対日協力は地下共産党の要請によるという説が出ている。

本論文は周作人をめぐり、日本留学期の西洋近代文学理論および古代ギリシア文学の受容と、肋膜炎による長期療養を余儀なくされた1921年の思想転回を軸とした生涯にわたるギリシア文学との関与の有様について論じたものである。第1章ではハントとテーヌの理論を中国の伝統的文学観の枠組みを用いつつ受容し、文学の時間的空間的普遍性という特性のため外国文学紹介により中国の「国民精神」の改革も可能であるという自らの理論を構築したと指摘し、第2・3章ではテーヌと上田敏の影響下で古代ギリシア文学研究へと進み、その際には立教大学のアメリカ聖公会宣教師タッカーより古代ギリシアの言語と文学そしてキリスト教を学んだことを立証した。第4章では1910年以降の現世主義と美を愛する精神、霊肉一致の「自然」な人間社会を描くヘーローダース、サッフォーらの翻訳紹介は、中国が目差すべき理想像の提示であったこと、第6章では訳業から「被抑圧民族文学」が消えて古代ギリシア文学および日本文学がその主流となる転換期が、療養期の思想的危機が終了する1921年9月と重なる点に注目し、同年同月が周作人の文学的アイデンティティ確立期であると考察している。

本論文の主な成果は次の通りである。

(1) 周作人研究はその重要さにもかかわらず、これまで日本・中国・韓国・欧米においても一般に文学思想に偏重しており、翻訳論・外国文学受容論においては皮相的なレベルに止まっていたが、本論文はタッカーらとの影響関係を発掘するなど、西洋近代文学理論および古代ギリシア文学の受容に関する実証的研究を行い、周作人研究に新天地を開いた。

(2) 魯迅・周作人兄弟が上田敏より影響を受けた可能性が高いという指摘は、周作人・魯迅研究にとって新たな知見である。

(3) 東アジア文化研究者には珍しく、敢えて古代ギリシア語学習に取り組んだ意欲は評価に値する。

本論文第5章は「国民」「精神」などの概念を時に時代的文脈を十分に押さえることなく論じ、結論を急ぎすぎる嫌いもある。1921年の「被抑圧民族文学」翻訳は『小説月報』特集に協力したものであるため自己の感情を押さえて翻訳した可能性があり、あるいは実際の転機はそれ以前であった可能性も否定できない。日本留学期にすでに魯迅とは異なる文学観を抱いていたことは指摘の通りであろうが、それを過度に強調することにより、魯迅との同時代性を見失う懸念もあろう。また時に先行研究に対し十分な検証を行うことなくこれを継承する傾向も見られた。

だが上記(1)～(3)を中心に顕著な成果をあげており、その内容は博士(文学)論文として十分な水準に達しているとの結論を得た。